

ピューリタニズムの軌跡

—— セイレムの魔女裁判 (1692) と Cotton Mather (1663-1728) ——

岡本雅夫

倉敷芸術科学大学教養学部

(1995年9月30日 受理)

1. はじめに

Nathaniel Hawthorne の初期の作品、『アリスドーンの訴え』(Alice Doane's Appeal) (1835)¹⁾の梗概は、語り手の青年が、二人の若い女性のお供をして、6月の気持ちの良い午後に、セイレムの村を見下ろす'首吊りの丘'(Gallows Hill)に登って、自分のポケットから取り出した小説の原稿を女性達に読んで聞かせ、更に魔女裁判という歴史的事実を語るというものである。小説の原稿が'アリスドーンの訴え'と言う話で、『双子の兄弟に愛されたアリスが、弟とは知らずウォルターブルームを愛し、情を通じるという罪を犯してしまう。兄のレオナルドドーンは、アリスを奪った弟に対する嫉妬と、罪に誘ったことへの憎しみから、弟を殺してしまう。この全ては、魔法使いが仕組んだ陰謀であったが、アリスが、ブルームの亡霊に向かって訴え、これに答えて、ブルームは、アリスをあらゆる汚れから解き放ち、悪霊と悪魔は畏怖の念にうたれて、罪のない天使の面前から逃げ出すように姿を消す』というものである。次いで、語り手の青年は、この物語(romance)の舞台になっているセイレムで起こった魔女裁判という、人間性に潜む醜悪さと罪深さが引き起こした悲劇的な真実(truth)を、聞き手である二人の女性に語ることで短編小説『アリスドーンの訴え』は終わる。この後半のセイレムの事件に入る動機は、語り手が話すアリスドーンをめぐる兄弟の間で起こった悲劇が、聞き手の小心な女性には余りにも怪奇で、突拍子もないものなので、恐ろしさに震えさせるところか笑いを誘ったのを知って、それならばと、魔女裁判を持ち出したということである。

Though it was past supper time, I detained them a while longer on the hill, and made a trial whether truth were more powerful than fiction.

(夕げの時は過ぎていたが、私は、この女性達を今暫く丘にとどめて、真実が架空の事よりも力をもっているかどうかをためしてみたのである。)²⁾

語り手の青年は、アリスと兄レオナルドが立っている墓場に眠る人達の亡霊の世界を描き出した語り口を使って、セイレムの魔女裁判で、魔女と告発された哀れな人間や、告発する側に立って狂気と残忍さを発揮した人間、とりわけ魔女、魔術等に関する神学的根拠を構築し、魔狩りヒステリー(a witch-hunting hysteric)という悪評を浴び、ピューリタ

ン信仰の指導者の立場から、魔女裁判の過程で重要な役割を演じた権威者と目されている
 コトナザーの姿を象徴的に描き出すのである。処刑場に向かう人達を、凝縮した無駄の
 ない口調で描写する事実は、聞き手の涙を誘うに十分なものであった。

.....

Keeping pace with that devoted company, I described them one by one; here tottered a woman in her dotage, knowing neither the crime imputed her, nor its punishment; there another, distracted by the universal madness, till feverish dreams were remembered as realities, and she almost believed her guilt. One, a proud man once, was so broken down by the intolerable hatred heaped upon him, that he seemed to hasten his steps, eager to hide himself in the grave hastily dug, at the foot of the gallows.

As they went slowly on, a mother looked behind, and beheld her peaceful dwelling; she cast her eyes elsewhere, and groaned inwardly, yet with bitterest anguish; for there was her little son among the accusers. I watched the face of an ordained pastor, who walked onward to the same death; his lips moved in prayer, no narrow petition for himself alone, but embracing all, his fellow sufferers and the frenzied multitude; he looked to heaven and trod lightly up the hill.³⁾

.....

(犠牲になった人達と歩調を合わせて歩きながら、私はその人達を一人ひとり描写した。老いぼれた女が一人、自分に負わされた罪もその罰も知らないで、よろけている。また一人、世間全体の狂気に頭がおかしくなって、熱に浮かされてみる夢が、ついには現実の事だと記憶してしまい、今では自分が罪を犯したと殆ど信じている女がいる。かつては誇り高い人間であった男が一人、自分に対して向けられた憎しみに耐えられず心砕かれて、足を速めながら、首吊り台の下に急いで掘られた墓穴に、姿を隠したい様子である。この人達がのろのろと進んでいく時に、一人の母親が振り返って、のどかな様子のわが家に目を向け、直ぐにその目をそらした。心の中でうめき声を上げ、この上ない悲痛な苦悩を味わっていた。自分を魔女であると告発した者の中に幼い息子がいたからである。牧師に任命されていた男の顔を見つめると、他の者達と同じように魔女と告発されて、処刑されるために歩いていた彼の唇は、祈りを唱えるのに動いたが、それは自分だけの為に祈るという心の狭いものではなくて、自分と同じ苦しみにある人達や、魔女騒ぎに熱狂した人達全てを包容するものであった。彼は目を天に向け、軽い足取りで丘へ登っていた。)

Behind their victims came the afflicted, a guilty and miserable band; villains who had thus avenged themselves on their enemies, and viler

wretches, whose cowardice had destroyed their friends, lunatics, whose ravings had chimed in with the madness of the land; and children, who had played a game that the imps of darkness might have envied them, since it disgraced an age, and dipped a people's hands in blood. In the rear of the procession rode a figure on horseback, so darkly conspicuous, so sternly triumphant, that my hearers mistook him for the visible presence of the fiend himself; but it was only his good friend, Cotton Mather, proud of his well won dignity, as the representative of all the hateful features of his time; the one bloody-thirsty man, in whom were concentrated those vices of spirit and errors of opinion, that sufficed to madden the whole surrounding multitude. And thus I marshalled them onward, the innocent who were to die, and the guilty who were to grow old in long remorse—tracing their every step, by rock, and shrub, and broken track, till their shadowy visages had circled round the hill-top, where we stood. I plunged into my imagination for a blacker horror, and a deeper woe, and pictured the scaffold ……⁴⁾

(魔女騒ぎに熱中した連中の犠牲になった人達の後から、悪魔に苦しめられた人達がやってくるが、これは罪を犯した惨めな人達の一団である。自分たちの敵に、魔女の烙印を押して復讐をした悪党たちであり、その臆病さが友人達を殺してしまった卑劣な連中だ。狂気の人達もいる。その狂乱がこの土地の狂気と調和してしまったのだ。そして子供達もいた。この子供達は、暗黒界の小鬼達が羨んだかも知れないゲームをして遊んだのだ。というのは、このゲームは、ひとつの時代を辱め、住民全ての手を血に浸したからである。この行列の後ろに、馬に跨った人の姿がある。黒々と際立って目立ち、容赦のない勝利を誇っている様子なので、私の話の聞き手は、この人物を、悪霊が人間の姿で現れたのだと誤解してしまった。しかしその悪霊の良き友人に過ぎない、コトンマザーであった。彼の時代のあらゆる憎むべき特徴の代表者として立派に獲得した威厳を誇っていた。血に飢えた連中の一人で、彼を取り巻く多くの人たち全てを狂気に追い込むに十分な、悪徳に満ちた精神と様々な誤りを持つ意見が、その一身に集中していた。私は、この様にして、これから死のうとしていた罪の無い潔白な人達、これから長い年月の間、良心の呵責に苦しみながら老いていくことになる、罪を犯した人達を先導して進んでいった。彼らの足取りを一步一步、岩や、灌木や、でこぼこ道などをたどって行くと、私達が立っている丘の上を、ぼんやりとしたこの人達の顔がぐるりと取り巻いたのである。私は更に暗い恐怖と、より深い悲哀を想像してみようとした、そして首吊り台を思い描いたのである……)

小論では、ホーソーンが、『彼の時代のあらゆる憎むべき特徴の代表者』と厳しく批評しているコトンマザーと、魔女裁判との関わりについて考察するために、1691年から1692年にかけて、特にセイレムに集中して起こった魔女騒ぎより以前に書いた、『記憶すべき魔術と悪魔憑きに関する神慮』(“MEMORABLE PROVIDENCES, relating to WITCH-CRAFTS and POSSESSIONS. Written by Cotton Mather, Minister of the Gospel and Recommended by the Ministers of Boston and Charleston. Printed in Boston in N. England by R. P. 1689”)を取り上げて、コトンマザーが、魔女騒ぎに対して、ピューリタン指導者の立場からいかなる信念や解釈を示したのかを読み、この事件が起きた歴史的な文脈を辿り、ホーソーンのみならず、一般的に定評となっている、マザーに与えられた厳しい評価を改めて考察してみたいのである。

2. セイレムの魔女裁判について

魔女裁判の顛末を、“The Puritans in America”⁵⁾は、次の様に要約している。【1691年から、1692年にかけての冬に、二、三人の女の子に、常軌を逸した行為が認められた。しかし、そのような行為が正常に戻らないので、魔法(witchcraft)という言葉が説明として囁かれ始めた。呼ばれた医者も、自然な原因を見つけることが出来なかったのである。1692年の二月の終わり頃に、判事などがセイレムの外からやって来て、悪魔を呼んでいる(“entertaining Satan”)という理由で拘束されていた三人の女性を尋問した。その内の一人、西インド諸島からやって来ていたテイチュバ(Tituba)という奴隷が、若い娘達と薬を調合したり、夜、森の中で悪魔と酒盛りをしたと自白したが、この自白によって、春頃には、次々に、自白はしていないながらも、魔女と告発され、拘束される人達で、エセックス(Essex)の牢獄は一杯になった。しかしこの時まで、誰一人裁判にかけられてはいない。その原因は、一つには、これらの魔女と告発された人間をどのように扱うべきか、その方法が全体的に分かっていなかったこと、また、マサチューセッツ全体の法体制の効力が、1684年の特許状喪失以来、疑問視されていたからであった。新総督のウイリアムフィップス(William Phips)は、五月に到着すると直ちに、聴聞審理裁判所(Court of Oyer and Termino)を開設した。サムエルシューアル(Samuel Sewall)とジョンホーソーン(John Hathorn)(ホーソーンの先祖に当たる人で、尋問に当たって厳しかったといわれ、ホーソーンがこの事実を嫌悪して、姓にwを加えてHawthorneとしたことは、よく知られている)は、その判事であった。九月の終わりまでに、19人が絞首刑になり、1人が拷問の石責めで死んでいる。このセイレムの事件以前に、ニューイングランド全体にわたって、魔術(witchcraft)事件は散発的に起こっていたが、セイレム程に集中してはいなかった。魔女として処刑された人間の死体の数が増えるにつれて、陪審員や判事達は動揺した。特に、ボストンの牧師達は、時折警告を発していたインクリースマザー(Increase Mather)を先頭に、この陰惨な裁判に反対し、急いで発表された『良心の訴訟問題』(Cases of

Conscience) という論文の中で、インクリーズマザーは、裁判の中止を要求したが、それはあやふやな証拠や権威に基づいて、裁判が行われていたのを知っていたからである。裁判で、告発する側の最も強力な論拠は、完全な自白 (outright confession) であった。それが、判事達の求める主な目的になった。これらは、時には医学的証拠によって強化されたが、普通は『魔女の乳首』 (witch's teat), つまりサタンの子に乳を飲ませるのに使用すると考えられていた異常な突起が、身体のどこかにあることを確認することであった。しかし、法廷は主として、生き霊証拠 (spectral evidence) に頼らなければならなかった。即ち、苦しみ悩まされているという人間が、自分のところへ魔女と告発されている人間の生き霊がやってきたという主張、或いは、最近死んだ人の幽霊がやって来て、被告がサタンの盟友であることを明らかにしたという主張などを取り上げなければならなかった。この種類の、被告を有罪にする証拠は、常にボストンの牧師達を不安にしていた。そして、コトマザーの父親インクリーズマザーは、自分の疑問を明白な言葉で表現した。

It were better that ten suspected witches should escape, than that one innocent person should be condemned. ⁶⁾

(一人の罪のない人間が死刑の宣告を受けるよりも、魔女と疑われた十人が逃れるほうが良かったのである。)

この時から、裁判所の権威は崩壊し、フィップスは、十月に法廷を解散した。』1693年、フィップス総督は、大赦の宣言書を発行して、150人の魔女を放免した。1711年、議会は、魔女として処刑された人達に対する私権剥奪の議案 (the bills of attainder) を破棄し、補償金を支払った。更に言えば、1957年8月28日、マサチューセッツ州議は、裁判の犠牲者やその子孫が受けた苦痛と不名誉を軽減する法的措置を講じる決議をしている。

以上が、セイレムの魔女裁判の発端から終息までの要約である。

ホーソーンの『アリスドーンの訴え』について詳細に論じている G. R. Thompson は、Lectures upon Witchcraft (1831), Salem Witchcraft (1867) の著者 Charles Wentworth Upham を語り手の青年が言及する歴史家であるとしている。ホーソーンがアップハムを歴史家として評価していないのは、語り手の口調から明らかであるが、マザーに対する厳しい批判という点では同調している。このアップハムは、マザーと同時代のロバートカレフ (Robert Calef 1648-1719) が、マザーや、牧師達に対する侮蔑を込めた痛烈な批判として発表した、『見えざる世界の更なる驚異』 (More Wonder of the Invisible World 1697) を基にしてマザーに批判的であるとされている⁷⁾。カレフはセイレムの魔女裁判を攻撃し、裁判の正当性を主張して『見えざる世界の驚異』 (1692) を書いたマザーに反論する。

..in conclusion putting the government upon a speedy and vigorous prosecution according to the laws of God and the wholesome statutes of the English nation; so adding oil, rather than water to the flame: in effect telling the world that those executions at Salem were without and against

the advice of the ministers expressed in those cautions, purposely hiding their thanks for what was done, and exhorting to proceed ……

But though the ministers' advice or rather, Mr. C. Mather's, was perfectly ambidexter, giving as great or greater encouragement to proceed in those dark methods than cautions against them, yet many eminent persons being accused, there was a necessity of a stop to be put to it.⁸⁾

(マザーの助言は) 結論として、神の法と、英国の健全な法律に従って、政府に敏速で活発な起訴を勧め、燃える火に水よりは、油を注いだのである。…… 実際は、世間に対しては、セイレムの処刑は、警告のなかで述べておいた牧師達の助言無しに、又その助言に反して行われたのだと言いながら、既に行われたことに感謝していることを故意に隠し、更に続行することを勧めている。…… しかし、牧師達の、いやむしろ、コトンマザー氏の助言は、完全に二枚舌のそれで、恐ろしいやり方を止めるように警告するよりは、一層大いに奨励している。多くの立派な人が告発されているので、どうしても(裁判は)止めなければならなかった。)

1963年の秋、コトンマザーは、ボストンの17歳の娘が、セイレムで魔女に苦しめられた娘達と同じ徴候を示しているのを知り、ボストンで魔女騒動が拡がるのを恐れて実際に、この娘が、魔女の犠牲なのかどうかを調べる。この審問の様子をカレフは、インクリースマザーや多くの指導的立場の市民と一緒に見聞したが、マザーの魔術の存在を確信する言動に愕然とし、以来カレフとマザーの戦いが始まったとされている。カレフは、中世の迷信に対して見事な戦いを挑んだ啓蒙された英雄であるとか、自分が軽蔑するエリートの聖職者を苦しめるために、格好の問題を見つけた便宜主義者であるという評価を得ている⁹⁾が、両者の対立は、ピューリタン共同体の中で、次第に経済力や政治力を増していく商人の、合理性と実証性を重んじる精神と、マザーが代表するピューリタン神学と信仰との衝突が顕在化したものであることは明らかである。

3. セイレムの魔女裁判の時代背景

カレフに、二枚舌の狡猾な人間であり、魔女騒ぎの火に油を注いだと非難され、セイレムの事件以後は、すっかり威信を失ってしまい、父親のインクリース程の政治力を持たなかったといわれるコトンマザーが生きた17世紀半ばから18世紀前半は、ピューリタン共同体(Puritan Commonwealth)にとって、最も厄介な宗教上の問題が持ちあがっていた。第二世代、そしてそれ以降の世代のピューリタン達や、新しくやって来る移住者の中には、正式に洗礼は受けているが、救いの恩恵(saving grace)を経験していない、従って教会の構成員の資格を持たないし、子供に洗礼を受けさせることが出来ない人たちが増えたのである。この事態は、様々な社会的、心理的な要素によって、政治的、経済的意味合いを

帯びてきたし、重大な問題を教会にもたらしたのである。つまり教会が、共同体の中核として、個々の人間の精神的安定や、共同体の政治体制を維持し運営するに十分なだけのいわゆる『見える聖徒』(visible saints)の教会員数を得ることが難しくなったのである。1657年、この問題の解決のためにコネティカットーマサチューセッツ合同の牧師会議が開かれ、妥協的な方策として『中間契約』(“Half-Way Covenant”)が承認された。マサチューセッツの地方集会(General Court)は、更に進んで1662年に、正式に教会会議(synod)を招集し、その歴史的な審議に従って、『洗礼は、教会の一員である資格として十分に本質的であり、洗礼を受けている者は、(救いの恩恵の経験が無くても)その子供に洗礼を受けさせて神との契約に入らせることが出来る』と宣言した¹⁰⁾。もっとも、再生(regeneration)の経験は、依然として、聖餐に与かる教会員の資格として要求されていた。神聖共同体(Holy Commonwealth)に参加する者は、回心の経験を会衆の前で語り、そのような内面的な確信だけで無く、公共の場で回心の証拠である良き行いをして見せる『見える聖徒』でなければならないというピューリタン共同体の理想は、次第に変容する社会の現実に妥協を迫られたのである。敬虔を重んじ、忠実に神の言葉に従い、神との契約を果たすというニューイングランドの創始者達の宗教的な枠組みが崩れ始めたのである。1679年、インクリースマザーが召集した教会会議は、結論として次の言葉を記録している。『これらの教会には、多くの信仰告白者の中に、敬神からくる力が、目に見えて非常に大きく衰退している¹¹⁾。』こうした、ニューイングランド全体に広がる敬虔さの衰退という、ニューイングランド共同体の宗教的基盤を揺るがす極めて重大な事態に加えて、次々に、様々に形を変えた不幸や災いが襲っている。1660年、王政復古により英国の支配が強化され、第一次航海条例が、3年後には第二次航海条例が制定される。交易が盛んになるにつれて、船の難破事故が多発し、一方では、1675年には、インディアンとの戦いでは、史上最も流血の戦いといわれた King Philip's War が始まり、翌年に終わるまでに、入植者の白人男性の殆ど十人に一人が死んだとされている。この戦争の終わる頃の10月の或る日、インクリースマザーは、黙示録3:3『—それを堅く守り、また悔い改めなさい。』¹²⁾について説教をしたが、それから二三時間の内に、彼の家を含めボストンのかなりの部分が灰燼に帰し、3年後にも再び大火にあって、多くの財産や人命が失われている。1678年には、ボストンの住民の凡そ15パーセントが天然痘に罹り、700人も人間が死に、更に何百人もがこの病気の痕跡を身体にとどめたのである。1684年には、マサチューセッツ湾植民地は、航海条例をめぐるチャールズ二世との争いから、特許状を取り消される。翌1685年、チャールズの後を継いだジェームズ二世は、ニューイングランド領(New England Dominion)の経営を目指して、マサチューセッツを、ニューヨークやニュージャージーと合併して、エドモンドアンドロス(Sir Edmund Andros)を新総督として派遣する。

しかし、1688年の名誉革命(Glorious Revolution)によって事態は一転する。アンドロスはボストンから追放され、プロテスタントの英国王ウィリアムと王妃メアリ(William and

Mary)は、1691年マサチューセッツとプリマスを合併して王領とし新総督フィップスを任命する。しかし、外交官としてのインクリースマザーの努力によって得られた新しい特許状は、ピューリタン社会の構成原理を否定するものであり、ニューイングランド全体に広がる敬虔の衰退を制度として固定するものとなった。即ち、選挙権、被選挙権は、教会員であることが資格では無く、財産に基づくものとなり、そして更に英国国教会(Anglicanism)はボストンに教会を置いたのである。1664年以来、ボストン第二教会(Boston's Second Church)の牧師であり、1685年から1701年までハーバード大学の学長であったインクリースマザーと、1683年に、同じ教会の牧師助手に任命されたコトンマザーは、ニューイングランドの教会を指導する権威ある立場にあって、ピューリタンの正統を維持する拠点として教会を再生し、聖徒による統治を主張する運動を展開しようとする頃に、1692年、セイレムにおける魔女騒ぎという一種の集団ヒステリー事件が起こったのである。1660年代以降のマサチューセッツ湾植民地が経験する不幸や災難は、神との契約と、聖徒の働きによって、この植民地に訪れるはずの至福千年に対して、インクリースマザーですら不安を抱いたのである。George Bancroftは、神に見放されているのではないかという不安が、魔女ヒステリーの核心であるとして『マサチューセッツの一般の人たちの心は、神の英知を認知することをしないで、この宇宙を見つめるよりむしろ、目に見えない世界からのあらゆる話を進んで受け入れた。』¹³⁾と述べている。

4. 魔女騒ぎの文化的背景

Emory Elliottは、『このセイレムの事件は、ニューイングランドの歴史の中で、古い宗教的価値観が疑問視され、新しい世俗的な価値観が形成されつつあった、一つの重大な転換期を示すものである。従って、魔女妄想(witchcraft delusion)は、非常にしばしば、深遠な文化の変質が生じた現場であると認識されている。……我々は、(魔女事件)のぼんやりとした動機と、それがもたらした衝撃的で残酷な公然たる結果との関連を把握しようとするれば、言葉と表現(words and expression)に目を向けなければならない。セイレム村では、言葉と想像力が、高く聳えるキリスト教徒のユートピアの最後の日々に起こった破局的な出来事の中心的構成要素である。言葉が、いかなる人間といえども陰謀を企む悪人であるかも知れない邪悪な共謀組織を、写し出したのである。告発された人達は、隣人の間では、突然に、悪魔、怪物、敵、異人、(demons, monsters, enemies, aliens)……暗黒の世界からやって来た異国の他人に変容したのである。何十年も間の自然の災害や、政治的迫害、そして流血の戦いにも生き残り、繁栄さえしたが、セイレムの住民は、自分達の境界内に、最も恐るべき驚異を発見したのである。二十人が死に、多くの人間が投獄された悲劇的な夏に、セイレムの住民は、この後で起こるすべての形の'魔女狩り'(witch-hunting)の模範になる裁判過程を演じたのである。』¹⁴⁾と述べて、セイレムの事件は、様々な外的要因に加えて、人間の内面に、言葉と想像力が写し出す目に見えない世界の恐怖と

驚異によって生じたとしている。

ピューリタン社会の中で、事件の発端になった魔女妄想が発生する文化環境はどうであったか、つまり、魔女、悪魔、生き霊などについてどの程度の認識や知識があったのかを考える必要がある。Richard M. Dorson は、“America In Legend” (1973) の中で『移住者達は、英本国や、ヨーロッパ大陸の祖先から受け継いだ民間信仰 (folk beliefs) をアメリカ大陸へ携えて来たのである。』と述べて以下のように記している。『植民地とチューダー、スチューアート王朝の幽霊話を並べてみると、文字通りそっくりであるのがわかる。神の裁き、神慮、魔女、魔術、幽霊、騒霊、人の姿をした悪魔、その仲間の見えない悪霊 (Divine judgement, providences, witches, witchcrafts, ghosts, poltergeists, a personalized Devil and his train of demons) は、大西洋の両岸で無数の逸話や伝説、警告的な話に主題を与えて来た。英国、アメリカ両国のピューリタンは、神慮を示す事件を日記に記録している。両国における魔術に関する裁判の法廷記録には同じよう悪魔 (maleficium) の記述がある。英国と植民地では、聖職者も一般の人達も慇懃な紳士の姿をした悪魔、黒い男、黒い犬、その他の姿を変えた悪魔を恐れたのである。Katherine Briggs’s “Pale Hecate’s Team”, Alan Macfarlane’s “Witchcraft in Tudor and Stuart England”, Keith Thomas’s “Religion and the Decline of Magic” 等の優れた研究書は、16世紀17世紀の英国の宗教的な民間信仰を詳細に記載しているが、これらの書物が北米植民地で読まれたのである。George Lyman Kittredge は、自分の古い、典型的な著作に、“Witcraft in Old and New England” という題目を付けたが、大西洋を越えても、魔女は存在しているという信念が連綿として存在することを示すためであった。

神の意志や意図を示す超自然的な兆候として現れる神慮 (providence) ということを英国人もアメリカ人も確信していた。カルビン (Calvin) は、“Institutes of Christian Religion” (1536) の中で、超自然的な出来事は、日々起こっていると述べていた。そして英国、アメリカ両国のカルビン派ピューリタンは、そのような超自然的な出来事を、聖徒と罪人に対する神慮の証拠として日記に書き留めている。

英国の学者、Matthew は、顕著な神慮を記録することを考えたが、それをインクリースマザーが、マサチューセッツで首尾よく実現した。マザー親子が記録した神慮 (providences) の主題は、奇形児の出生、罪人に対する裁き、空中に見える軍勢など、英国で観察されたものになっている。…… それでは、植民地の民間伝承は、英国の民間信仰が移植されたものだけに過ぎないのであろうか。まったくそうであるとは言えない。アメリカのピューリタンによって発達したいくつかの小さな変化 (minor variations) が見られるのである。幾つもの部族を成しているインディアンは、英国では見られない全く新奇な存在であった。メインからカロライナまで至る所で移住者達は、インディアンの魔法を目撃したことを報告している。そして、一様にこのインディアンの魔法師 (powaws) の魔法を悪魔 (Devil) との関係に結びつけている。……

ピューリタンが発達させた契約神学 (covenant theology) は、神と聖徒との契約のみならず、悪魔、魔女と、罪人との間にある契約関係を含むようになった。実際、ニューイングランドの神学者は、契約思想を拡大して、民間伝承の超自然的な形態をもそれに含めたのである。……ピューリタンや他の移住者達が受け入れている民間伝承—神慮、裁き、幽霊、生き霊、魔術、騒霊、悪魔との盟約—は、他の時代や場所でも知られていたものであるが、最初の世代のアメリカ人にとっては、緊急に必要なものであった。マサチューセッツ湾植民地の教会や民間の指導者は、一般に知られている民間伝承を自分達のために役立てたのである。指導者達の懸命な目的は、多数の敵が内部からも外部からも脅威を与える荒野の中で、神聖な社会、聖徒達の契約に基づく共同体を建設することであった。英国国教徒 (Anglicans) からクエイカー教徒 (Quakers) に至るまで、偽りの教義に従う者、敬虔な信者仲間のように偽装している罪人や異端者、森の中にいる未開人、そして勿論、サタンやその配下の悪魔の軍勢や魔女の団、これら全てがピューリタンの国家を破壊しようとしていた。従って、マサチューセッツの神権主義者 (theocrats) は、主 (the Lord) の敵や、自分達の敵との絶え間ない戦いにおいて、主は自分達を支えてくれることを証明しようとした。そして、この見地から、17世紀の植民地で、誰もが普通に話題にする様々な超自然的な現象 (preternatural manifestations) を解釈したのである。……1692年に起こったセイラム村での魔女の活動を、牧師や判事 (ministers and magistrates) は、立派な人達の中に不和の種を蒔いて、共同体を破滅させようとする悪魔が入念に計画したものであると見なしたのである。……』¹⁵⁾

Richard M. Dorson によれば、植民地時代の民間伝承は、英本国やヨーロッパ大陸のものを反映したに過ぎないのであり、アメリカ植民地で発生した新種は、インディアンに関するものと、ピューリタンが発達させた契約神学と超自然的な現象との結びつきからきたものということになる。アメリカの植民地時代の特に神慮に関する民間伝承は、英本国やヨーロッパにその根源があり、一般の住民の間で親しまれていたが、ピューリタンの聖職者、中でもコトンマザーの著作や説教などによって、ピューリタン版として普及して、時に利用されたことが判るのである。Emory Elliott が言う、言葉と想像力の根源がここにあることは明らかである。

5. コトンマザーと魔女裁判

ホーソーンが、血に飢えた魔女狩りの張本人と厳しく非難しているコトンマザーは、シューアル判事 (Samuel Sewall) の日記の中にその姿を現している。

Aug. 19th, 1692. This day George Burrough, John Willard, Jh Procter, Martha Carrier and George Jacobs were executed at Salem, a very great number of Spectators being present. Mr. Cotton Mather was there. Mr. Sims, Hale, Noyes, Chiever, &c. All of them said they were innocent,

Carrier and all. Mr. Mather says they all died by a Righteous Sentence. Mr. Burrough by his speech, Prayer, protestation of his Innocence, did much move unthinking persons, which occasions their speaking hardly concerning his being executed. (下線筆者)¹⁶⁾

シュール判事の同じ日記の8月11日の個所に、魔女裁判の審理が始まったことが記されているので、一週間後の判決ということである。この日、処刑された人として記されている中に、15歳の少女 Mary Lacy Jr に告発され、1680年から2年間、セイレム村で牧師を勤めたことのある Burrough の名前がある。告発された者たち全てが、無実の罪であることを主張し、そして Burrough の弁舌、祈り、無実であるという申し立てによって、思慮の無い人達が心を動かされ、Burrough が処刑されることに反対の声を上げる中で、マザーは、『告発された者は全て、正当な判決によって死ぬのである。』と法廷で断言している。マザーはこの『正当な判決』とする論拠を、この年に発表した『見えざる世界の驚異』(The Wonders of the Invisible World) の中で展開している。

…… And the houses of the good people there are filled with the doleful shrieks of their children and servants, tormented by invisible hands with tortures altogether preternatural. …… the terrible plague of evil angels has made its progress into some other places, where other persons have been in like manner diabolically handled. These our poor afflicted neighbors, quickly after they become infected and infested with these demons, arrive to a capacity of discerning those which they consider the shapes of their troubles; and notwithstanding the great and just suspicion that demons might impose the shapes of innocent persons in their spectral exhibitions upon the sufferers (which may perhaps prove no small part of the witch plot in the issue), yet many of the persons thus represented being examined, several of them have been convicted of a very damnable witchcraft: yes more than one—twenty have confessed that have signed unto a book which the devil showed them and engaged in his hellish design of bewitching and ruining our land. We know not, at least I know not, how far the delusions of Satan may be interwoven into some circumstances of the confessions; but one would think all the rules of understanding human affairs are at an end if, after so many most voluntary harmonious confessions, made by intelligent persons of all ages in sundry towns at several times, we must not believe the main strokes wherein those confessions all agree, especially when we have a thousand preternatural thing every day before our eyes, wherein the confessors do acknowledge their concernment and give demonstration of their

being so concerned. ¹⁷⁾……

(そして、セイレムのその善良な人達の家は、その家族の子供達や奉公人の悲しい叫び声に満ちている、全く不思議な、激しい苦痛を加える目に見えない手で苦しめられているのだ。……悪の天使の恐ろしい災難は他の所にも及んで、そこではまた別の人達が、同じように悪魔に苦しめられている。これらの苦しみを受けている我々の隣人は、これらの悪魔に冒され、取り憑かれてから、自分達を苦しめているものの姿と考えるものを識別する一種の能力を身に付けている。そして、悪魔は、罪の無い洗浄な人間の姿を生き霊として苦しんでいる人達の前に現すのではないかという、非常に大きな当然の疑惑があるけれども、(これは、今問題の悪魔の計画のかかなりの部分を多分証明するかも知れないが)生き霊として姿を悪魔によって現された人達の多くの人が尋問を受け、そのうちの数人が、地獄に墮ちるも当然の魔術に関与したことで有罪を宣告された。実際、一人どころか、二十人もが悪魔が示した名簿に署名し、人間に魔術を掛け、我々の土地を滅ぼそうという、悪魔の身の毛のよだつ計画に従事したという事を告白したのだ。これらの告白を生み出した幾つかの状況と、サタン妄想がどれ程絡みあっているのかは、我々には分からないし、少なくとも私は知らない。しかし、もしあれ程多くの非常に自発的な、調和のとれた告白を、幾つもの時代に、様々な町で、あらゆる年齢の知性のある人間がしてきた後になって、特に、我々の眼前で、毎日異常な事件が起こり、告発者達がそれらに関与していることを認め、関与したことを証明する時になって、それらの告白を信じてはならないという事は、人間に関する出来事を理解する全ての法則は無用だと言うことになるだろう。) ……

コトンマザーは、悪魔に苦しめられていると訴える子供達によって、生き霊として現れたと証言される人間は、魔術を使ってその子供達を苦しめている証拠を自ら示しているということ、そして、自分が悪魔の計画に関与したという告白は、『人間に関する出来事を理解する全ての法則に照らして信じる他はない』と、裁判の過程で採用された『生き霊証拠』(Spectral Evidence) と、『告白』(Confession) の正当性を主張する。父親のインクリースマザーが、この裁判の停止をもとめて発表した“Cases of Conscience”の序文に自分の署名をしなかったコトンマザーにとって、セイレムの事件は、正に悪魔の仕業でしかなかったのである。裁判の進行にこれほどの影響を与えたのは、ボストンでグッドウィン家(Goodwin)の子供達が、悪魔に苦しめられているというので、これを実際に観察した記録を発表して以来、魔術や魔女に関する権威として一目置かれ、相談を受けたり、いわゆる悪魔払いを依頼されるようになっていたからであると考えられる。この記録が、『記憶すべき魔女と悪魔憑きに関する神慮』(MEMORABLE EVIDENCES, relating to WITCH-CRAFT and POSSESSIONS) という題目で1689年にボストンで出版されている。

6. 『記憶すべき魔術と悪魔憑きに関する神慮』(1689)¹⁸⁾

コトンマザーは、ジョンコトン (John Cotton) を母方の祖父に持ち、ハーバード大学の学長になった父親インクリースマザーの息子として1663年に生まれ、11歳で、ハーバードに入学した秀才であった。ボストン第二教会の牧師である父親の助手に任命されたが、1686年以降は、著作活動に入り、450冊を越える書物を出版したが、その中には、アメリカ文学の傑作とされる、“Magnalia Christi Americana” (1702) が含まれている。生涯を通じて、ボストンの宗教界では、卓越した地位を保っていたが、父親のように政治力も外交手腕も持たず、父親の様に『第一級のアメリカのピューリタン』とは言えないという評価を得てはいたが、その影響力は、父親に劣らないものがあつた。

コトンマザーは、ニューイングランドを、ピューリタン会衆派の共同体 (Congregational Commonwealth) にするという理想が、教会の自由化 (toleration) によって破れた事実を受け入れて、英国国教会やその他の新しい宗派 (innovators) の勢力を抑えるため、会衆派と長老派 (Presbyterian) の提携を強調したが、セイレムの事件で威信を失い、父親のインクリースマザーが、John Leverett を初めとする台頭する商人達の勢力に押されてハーバードを追われてからは、教会の組織に関わることに背を向けて思策に耽ったということである。マザーが次々に出版する著作を目にし、社会改革の提言を果てしなく口にするのを聞いた多くの人々は、マザーを冗談の的にした。マザーは、それを承知して、『私は、この世で私が知っている誰よりも、自分に不利な本を書いてきた、そして、私を中傷し、非難し、裏切るパンフレットを書いてきた。』と言っている¹⁹⁾。

小論でこれから考察する『記憶すべき魔術と悪魔憑きに関する神慮』は、セイレムの事件が起こる二年程前に書かれたが、いわゆる魔術や魔女についての、教会指導者が記述した権威ある説明書と考えられ、セイレムで集中的に魔女騒ぎが起こり、多くの人間が逮捕され、悪魔との関わりが究明されようとする時、裁判の過程でこの著作が有力な拠り所になったと思われる。この著作の内容 (第一事例) は、ボストンの或る一家の子供四人が魔女と疑われる女に苦しめられる。その女が魔女として処刑された後も、子供達は、悪魔憑きの徴候を見せる。マザー自身が、その子供達の内、年長の13歳の女子を自宅に引き取って観察すると同時に、神への祈りによって悪魔払いをするという構成になっている。小論では要点と考える節や個所を順を追って抄訳し、考察を進めることにする。

この著作の構成は、John Winthrop の孫に当たる Wait Winthrop (表紙のタイトルでは WINTRHROP になっている) に対する献辞、読者に対する牧師の推薦文、序文、本文 (33節)、後記、追記から構成されている。小論では、献辞から後記まで、要点となる節、個所を抄訳して検討を進めたい。(重要と考える個所だけ原文を抜粋する)

(i) 献 辞

『全能の神の格別の御処置と御配慮によって、幾つかの非常に驚くべき魔術と悪魔憑きに関する一部始終が広く世の中に知られる事になったのです。これは、一部は私自身の目

による観察と、一部は私が得た疑いのない情報によって、広くわが隣人に提供できることになったものです。』……

『悪魔に関するプラトンの概念、これについては、多分、この書物で記述する話の中では黙認しているように思えますし、それ以上に、キリスト教会の父祖と呼ばれる初期のキリスト教徒や学者によって採用されたのですが、真面目な人間がこの概念をどの程度まで扱うことを許されるべきかは、貴著の『聖書の神』(Scriptural Divinity)と『理性哲学』(Rational Philosophy)によって、貴殿が並はずれた判断を与えて下さるでしょう。もし私が、『悪魔論』(Doctrine of Demons)を論じたり、『魔法の密儀』(Magical Mysteries)についていろいろと考察をしたならば、若い頃にそれをかなり読んだり、考えたりしたことがあったということ、誇示したことになったかもしれません。しかし、そんなことは、私にとって便利の良いことでなかったでしょうし、私が教化しようと目指してきた一般大衆にとっても有益ではなかったでしょう。それ故、この書物の中で、私は一人のアメリカ人としてペンを取り(an American Pen)、短くではあるが全ての事について触れたのです。これは、貴殿のペンによって著された『不毛の荒野』(Desert)が、尊敬と名誉を得られましたのと同じ方法です。』……

『それ故、貴殿の慈悲深い、熟練した部下が、秘密の、強い薬を惜し気もなく与えてきた何百という病人だ人たちの名において、貴殿が、我々の幸福のために首尾よく努力する事で、貴殿の父君や祖父殿の後継者となられると長い間当然のように信じて来た貴殿の邦全体の名において、彼ら全ての名において、私は今心から、イエルサレムを愛する者全ての繁栄を祈ります。』²⁰⁾

この献辞によって、丁寧な表現ながら、このグッドウィン家の子供についての記録は、『自らの観察であり、疑いのない情報からである』として、筆者の観察や情報が、客観的であり、読者の信頼に値することを表明し、神慮によって悪魔や悪魔憑きに関する事実が明らかにされると述べて、教会、即ちピューリタン共同体の精神上的の指導者である立場からの使命感をにじませている。プラトンの悪魔の概念とは、ヨーロッパの古代からの異教の世界に登場する悪魔の概念に他ならず、『悪魔論』『魔法の密儀』などを読んでいて、それらの知識がマザーの観察の背景になっていることを示している。Richard M. Dorsonは、1681年に英国で出版された悪魔や幽霊の存在を主張する Joseph Glanvil (Oxford の卒業生で、ロイヤルアカデミーの会員であり、チャールズ二世の礼拝堂牧師であった)が著した“Saducismus Triumphatus”を、マザー親子がしばしば引用したことを指摘している。しかし、マザーが、自分が記録することは、全てアメリカで起こったことであると強調しているのは、当然のことながら、著者の独創性を主張しながら同時に、悪魔や幽霊は英本国やヨーロッパ同様、アメリカにも存在していることを信じていたのである。厳しい自然の中で生活する人達、とりわけ女性や子供には、肉体的、精神的不調に苦しんだり、悩む者が多かったことは知られている。その原因が医学的に明らかでなければ、魔女の関わり

や悪魔憑きが疑われることになる。従って、このマザーの記録は、得体の知れない病気や苦しみは何か、それから解放されるにはどうすれば良いかを教える、教会の指導書であるということである。

(ii) 読者に対する牧師の推薦文

『善悪いずれの天使の存在をも否定する、官能主義のサドカイ派の古くからの異端は、サドカイ派の死と共に消滅しなかったのである。そして人間が信仰も理性も捨てて、自分達が目で見たり手で触れるものしか信用しないことが、自分達の知恵だと考えている間は、これからも異端は消えはしないだろう。この愚かな意見がどれ程墮落した時代にはびこっているかは恐ろしいほど目につくのである。人間が無神論に安定することでいかに危険な打撃を受けるかを目にするのは、難しい事ではない。それ故に神は（聖書にこの真実が証しされているだけでなく）悪魔が時には、この世で神を否定する者の口を閉ざしたり、その口から出る信仰告白を歪めたりする様なことを喜んで許されるのである』（以下原文）

(The old Heresy of the sensual Saducees, denying the Being of Angels, either good or evil, died not with them; nor will it while men (abandoning both Faith and Reason) count it their wisdom to credit nothing but what they see & feel. How much this fond opinion has gotten ground in this debauched Age is awfully observable; and what a dangerous stroke it gives to settle men in Atheism, is not hard to discern. God is therefore pleased (besides the witness born to this Truth in the Sacred Writ) to suffer Devils sometimes to do such things in the world as shall stop the month of gainsayers, and extort a Confession from them.)

『魔女というもの、即ち、悪魔との契約、或は明白な盟約によって、能力が増大したり、むしろ悪魔によって増大されて、不思議な事をしたり、自然の成り行き以外にいろいろな事をするようなものが存在するかどうか、疑問を持つ者がこれまでいたのである。しかし、（神の言葉が、その様なものが存在して来たことを証ししてきたし、それらの体制を示していることだけでなく）その存在の明白な証明が無い時代は無いのである。というのは、全ての怪しい曖昧な偶然の出来事、或は神慮の特異な結果を、魔術の故にするのは愚かしいことであるが、異議なくそうせざるを得ないことが幾つもある。天使と人間は、この世で話を交わす様に造られてはいないし、悪魔との交わりは人間には禁じられている。天使の本質は霊的であり、神の言葉は、天使の行動の仕方に関してはそれほど詳細に語ってはいないので、我々が暗黒の世界の神秘的な事について、明らかに出来ることは僅かしか無いのである。悪魔からの、或はその手先からの報せは、全て迷妄と考えるべきであるし、或は、少なくとも、虚言の父たる悪魔の騙りに満ちた欺瞞に覆われている。そして、その報せの効力を考えると、我々に情報を与えるよりむしろ欺くものであるからである。

サタンとその手先が、神の子供である人間を、その境遇においてだけで無く、人間の身

体そのものや、その子孫を苦しめるのを許しておられる神慮の秘密は、測り知れない神の裁きと、理解を超える神の御業の行われ方の一部である。我々が、ただ一つ十分に確信出来ることは、御業の行われ方は、人間の幸福のために全体として作用する全ての御業の一部であるということである。神の恩恵がその御業によって試され、その人間の正しさが明らかにされ、その信仰と忍耐が申し分なく働くのである。』²¹⁾ (以下原文)

(It has also been made a doubt by some, whether there are any such things as Witches, i.e. Such as by Contract or Explicit Covenant with the Devil, improve, or rather are improved by him, to the doing of things strange in themselves, and besides their natural course. But (besides that the Word of God assures us that there have been such, and gives order about them) no Age passes without some apparent Demonstration of it. For, Though it be folly to impute every dubious Accident, or unwonted Effect of Providence, to Witchcraft; yet there are some things which cannot be excepted against, but be ascribed hither.

Angels & Men not being made for civil Converse together in this world; all Communion with Devils being interdicted us; their nature also being spiritual, and the Word of God having said so little in that oarticular their way of Acting; hence it is that we can disclose but a little of those Mysteries of Darkness; all reports that are from themselves, or their instruments, being to be esteemed as Illusions, or at least covered with Deceit, filled with the Impostures of the Father of Lies; and the effect which come under our consideration being Mysterious, rather Posing than Informing us.

The Secrets also of God's providence, in permitting Satan and his Instruments to mock His children, not in their Estates only, but in their Persons and their Posterity too, are part of His Judgment that are unsearchable, and His Wayes that are past finding out; only this we have good assurance for, that are among the All Things that work together for their good. Their Graces are hareby tried, their uprightness is made known, their Faith and Patience have their perfect work.

.....

【本書の記述は、観察力を働かせて読む者に、より一層明確に、次に挙げることを確信させるであろう。

「神も悪魔も、そして魔術も存在すること」「肉体的な苦しみは全て、神がサタンに、神の子供を苦しめるのを許しているのかもしれない事であること(時には事実許しているが)」「サタンと、サタンの手先の悪意は、神の子供に対しては、非常に大きいものであること」

「どんなに明るい福音の光が輝いていても、ある者達が悪魔の霊と地獄のような契約を結ぶのを阻止できないであろう」「祈りは、悪魔と、悪魔と盟約している者達の悪意の陰謀に対して、力強く効果的な救済策である」「神の慈愛を得ようとする者は、堅忍を祈らなければならない」「神は、しばしば祈りを信頼するように明らかに奨励されることがある、もっとも直には、求められた苦悩からの救いを成し遂げられないが」「神の恩恵は、最も悲痛で打ち続く苦難の中で、神の子供を支え、しっかりとその恩恵を保たれる」「悪魔や悪魔の代理人の攻撃を取り除くために、疑わしい、悪魔的な方法を利用しようという誘惑を拒否する者たち、全てを神に委ねて、神を辱め自らの良心を傷つけてまで、苦しみを取り除いてもらうよりは、むしろ耐えることを選ぶ者たちは、最後にはそれを決して後悔することはない」²²⁾ (以下原文)

(…… the following Account will afford to him that shall read with Observation, a further clear Confirmation That, There is a God, and, and a Devil, and Witchcraft: That There is no out-ward affliction, but what God may (sometimes doth) permit Satan to trouble His people withal: That, The Malice of Satan and his Instruments, is very great against the Children of God: That, The clearest Gospel-Light shining in a place, will not keep some from entering hellish Contracts with infernal Spirits: That, Prayer is a powerful and effectual Remedy against the malicious practices of Devils and those in Covenant with them: That, They who will obtain such Mercies of God, must pray unto Perseverance: That, God often gives to his people some apparant Encouragements to their faith in Prayer, tho He dose not presently perfect the Deliverance sought for: That, God Grace is able to support His Children, and preserve their Grace firm, under sorest and Continuing Troubles: That, Those who refuse the Temptation to use doubtful or Diabolical Courses, to get the Assaults of the Devil and his Agents removed: Choosing to Recommend all to God, and rather to endure Affliction, than to have it Removed to His Dishonour, and the wounding of their own Consciences, never had cause to report of it in the end.)

推薦文はこの後を次の様に締め括る。『本書に記述されている観察を熟読するなら、驚くべき神慮によって得られる信仰上の進歩と、適切にして賢明な教会の説教が一緒になって、読者はその心の中に当然の印象を抱くであろう。本書を読むことで、神を褒め称えることになり、それは、著者の苦労や精励を満足させるであろうし、その真摯な目的に叶うことであろう。このような成功は、神の恵みに依るもので、この中で記述されている最も重要なことの多くを、目と耳で証してきた我々も神に祈りを捧げるものである。』²³⁾

四名の牧師、Charles Morton, James Allen, Joshua Moody, Samuel Willard が連

名で署名しているこの推薦文は、17世紀末に、マサチューセッツの教会で行われていた説教や、“Half-Way Covenant”以降の宗教的には危機的な状況や雰囲気表現しているものである。「イエスキリストに敵対したサドカイ派の異端と、唯物論、無神論的異端の同一視」「神を否定する者の口を悪魔が閉ざし、告白を歪めるのを許される神」「呪術を行う女は、生かしておいてはならない】(“Thou shalt not suffer a witch to live” Exod. 22.18) という神の命令以来の魔女の存在」「魔女と悪魔との契約の實在」「敬虔なキリスト教徒の家庭にも魔女や悪魔の手が伸びること」「悪魔やその手先が人間を苦しめるのを許される神慮の測りしれない秘密」「神の恩恵」「魔女や悪魔の陰謀から救われる唯一の方策は、迷信を退け、祈りと堅忍のみ」……これらは、いわゆる超自然的、異常な出来事や、様々な形の不幸や災難に苦しめられる時、繰り返し強調され、会衆の意識や心理、想像力に様々な程度の影響を与え、その様々な形の反応の結果が、魔女騒ぎの一因であったと考えられている。

(iii) (序文)

「……本書には、疑問の余地のない確かな事が含まれている、そしてそれらは、考えられない程重要な事を示唆している。実際、これらの事は、記憶すべき神慮を観察してきた短い月日の間に収集したものの主要な一部であり、本書には、それについての所感を付け加えている。……」

「(さあ、この書よ) 汝、行って人類に告げよ。悪魔や魔女が存在すること。福音の陽光が訪れる所には、あの夜の鳥が現れることは殆ど無いが、ニューイングランドには、これまで、その夜の鳥の存在と活動の事例があったということ。異教徒の魔法使いが、しばしば熊や蛇、火などの形で魔界の支配者の姿を現して見せるインディアン的小屋のみならず、我々の神が常に崇められてきたキリスト教徒の家庭も、悪霊に悩まされてきたということ。世の人達に告げよ、神への祈りが、あらゆる悪魔や魔女の力を超えて為し得る全てのことを、そして、これらの怪物が喜んですることは何であるかを。数人の門外漢の読者に潜む悪魔共が、汝の著者に、もし汝を世に出すなら、大いなる恥辱を与えんと脅迫に及んだが、尚、ひるむことなく汝の為すことをせよ、そして、それによって、神の御名を頼りにしてきた者に加えられた妨害の故に、それらの悪魔に正しき復讐が下らんことを求めよ。」²⁴⁾

(原文) (Go tell Mankind, that there are Devils & Witches; & that tho those night-birds least appear where the Day-Light of the Gospel comes, yet, New Englnd has had Exemples of their Existence & Operation; and that not only the Wigwams of Indians, where the pagan Powaws often raise their masters, in the shapes of Bears & Snakes & fires, but the Houses of Christians, Where our God has had his constant Worship, have undergone the Annoyance of Evil Spirits. Go tell the world, What prayers can do beyond all Devils & Witches, and What it is that these Monsters love to do;

and though the Demons in the Audience of several standers-by threatned much Disgrace to thy Author, if he let thee come abroad, yet venture that, and in this way seek a just Revenge on Them for the Disturbance they have given to such as Have called on the Name of God.)

コトンマザーの序文も、悪魔 (Devils) と魔女 (Witches) が存在することを繰り返して強調する。インディアン魔法使いを持ち出すあたりが、ピューリタニズム的であるが、一般にキリスト教信仰に、つまり旧、新約聖書に記述されている悪魔の概念は、ギリシャ、ローマ文化の影響を経て次第に多少なりとも標準化したものになったとされているが、“Oxford Companion to Bible” (Oxford University Press 1993) によれば、次の通りである。【1) 悪魔の基本的な活動は、サタン (Satan) に捕らわれた人間を盲目にし、身体を麻痺させることにある。2) 悪魔は、人間には、外面的な存在だが、その力は、人間の無意識の水準で作用する内面的力によるものである。3) 悪魔と人間の意志がこのように結合していることは、神が許してきた、人間がサタンに捕らわれている状態を創りだすのである、そして、それ故にこの状態は、神が終結できるのである。4) このことが、神の言葉が、捕らわれた人間の信仰を喚起することによって、人間を捕らえている悪魔から解放できる理由である。5) 悪魔払い (exorcisms) がイエスの属性であることは、イエスが、その神の言葉を話す権威が与えられていることを示している。6) イエスの死と復活の後に、聖霊 (Holy Spirit) は、イエスの代理人達が、悪魔からの解放の仕事を継続することができることにした。しかし、代理人達は与えられた力によっても、悪魔からの反撃を免れることはなかった (2 Cor. 12.7)。7) この悪魔からの反撃は、救世主 (Messiah) の復帰の直前、地上の時の終わりに、極点かと誤る程にまで達すると考えられていた。(1 Tim. 4.1; Rev. 16. 13-14; 18.2)】

魔女 (witches) については、『[呪術を行う女 (魔女) は生かしておいてはならない] というモーセへの神の命令 (出エジプト記22-18) はよく知られているが、この他に旧約聖書のレビ記20-27, 列王記II 9-22にも、呪術を行う男、または女は、殺さねばならない存在として出てくる。サムエル記 I 28-7 には、『エン・ドルの魔女』 (the witch of Endor) としてよく知られている『交霊術に熟達した女』を意味する表現が出てくる。(“Find a woman who has a familiar spirit, and ……”). They told him that there was such a woman at Endor.” — The Revised English Bible 1989) エレミア記27-9, ミカ書 5-11, マラキ書 3-5 には、様々な形の魔術、妖術、占いや交霊を律法によって禁止することや、それらに対する予言者の攻撃が出てくる。また、歴代誌 I 10-13 には、サウルが、主に逆らって霊媒によって伺いを立てた罪によって殺されている。』²⁵⁾聖書以外では、法王インノケンティウス 8 世の命令によって書かれた『魔女の槌』 (“Malleus Maleficarum”-’Hammer of Witch’ c.1486) がある。これは、二人のドイツ人宗教裁判官 (Jacob Sprenger, Heinrich Kramer) が、魔女の確認と処罰のための教科書として書いたもので、魔女に関する権威ある書とし

て広く知られている。

コトンマザーは、聖書の真理に基づく伝統的な悪魔や魔女の概念に従って、様々な超自然的現象を解釈し、悪魔や魔女に捕らわれの身となっている状態から救われるには、ただひたすら全てを神に委ね、苦しみに耐え忍ぶこと、そして何よりも神に祈りを捧げることであることを説いている。悪魔や魔女が存在するという、まるで荒唐無稽な迷信を頑なに説く牧師たちであると、ボストンで次第に台頭する実証主義の商人階級は、敵意と侮蔑を込めた態度を示すようになる。マザーが、門外漢と呼んだピューリタン教会に反抗する勢力から脅迫を受けたことを序文の最後に挙げているのは、この時期に、ピューリタンの牧師が置かれている状況を雄弁に語っている。

メソジスト教会の創始者、ジョンウェズリー (John Wesley) は、その『信仰日誌』の1768年5月25日のところに、次の様に書いている。『一般の英国人は、いや、ヨーロッパの学問ある人たちの大部分は、魔女や超自然的現象に関する話を、単なる老婆のおとぎ話として、黙殺してしまった。これは、大変遺憾なことである。……魔女を黙殺することは、聖書を黙殺するに等しい。……私は、私の最後の息でもって、目に見えない世界についての一つの偉大な証明を、すなわち、すでにあらゆる時代によって確認されている魔女と超自然現象との説明を、不信心者に示したいと思う。』²⁶⁾

コトンマザーから百年後に、依然として、プロテスタントの指導者が、『魔女を黙殺することは、聖書を黙殺するに等しい。』と確信していることは、プロテスタントの頑な聖書解釈の一面を示しているもので、マザーが、特に並外れて、魔女の存在を信じる頑迷な宗教者であったわけではないと言える。学生時代から医者になることも考えたことがあるマザーは、1706年から、人生の終わりまで、聖書の真理と科学の真理を調和させることを目指した膨大な原稿、“Bible Americana”を残しているし、更に1720年代には、大衆の嘲笑を浴びながらも、天然痘のワクチン造りに努力しているのである。

(iv) 本文

(各節は抄訳するが、重要と考える部分のみ原文を抜き出すことにする)『魔術と悪魔憑き』(Witchcrafts and Possessions)『第一实例』(The First Exemple)²⁷⁾

(I 節)『ボストンの南部に、まじめで敬虔な、石工を職業とするジョングッドウィン(John Goodwin)という男がいて、有徳の妻との間に六人の子供を持っていた。この六人の子供の内、父親と一緒に働いている長男と、母親の胸に抱かれている幼児を除く四人が、非常に明白で途方もない、恐ろしい魔術の効力に苦しんできた。(…… have laboured under the direful effect of WITCHCRAFT) 実際のところ、この長男も時々、訳のわからない突き刺すような痛みとか、その他いろいろな痛みを感じたことがあった。敬虔な父親と乳飲み子以外は、誰もが時折そのような痛みを覚えたことはあったのである。しかしこれらの四人の事が、非常に悲しみを帯びた、これまでにはない調子で論じられたので、この事件の一部始終は、ニューイングランドの真面目で、真相を知りたがる読者の話題にのぼったの

である。』²⁷⁾

(II節)『その苦しんでいる、4歳から13歳位までの四人の子供は、宗教教育を喜んで受け、神とか神聖な事柄には、周囲が認めるほど愛着を抱いていた。両親も若く、常に忙しく喜んで働いていたので、怠惰の誘惑に負けるようなことはなかった。子供達の気質や気性がそのように敬虔であったので、子供達が、大人達を欺こうとして、わざとあの奇妙な発作を起こしているふりをしているとは、とても想像できることではない。実際、起こるはずもないことが子供達の身の上に起こったのであるが、その点で、子供達の様子を見た人達が驚く程の、いろいろな形で現れる悪魔のものとしか思えない力を、子供達が偽装して生み出すことは全く不可能であった。』

(Such was the whole Temper and Carriage of the Children, that there cannot easily be any thing more unreasonable than to imagine that a Design of Dissemble could cause to them to fall into any of their odd fits; …… it was perfectly impossible for any dissimulation of their to produce what forces of spectators were mazed at.)

この節で注意を引くのは、子供達が、悪魔の力に苦しめられて、いろいろな奇妙な発作を起こすのだが、それが偽装(Dissemble, dissimulation)ではない事が重ねて強調されていることである。マザーに疑念が無かったとは思えないのだが、これは重大な点である。

(III節)『1888年の真夏頃、13歳の娘が、何枚かの亜麻布が紛失したので、洗濯女が盗んだのではないかと問い詰めた。この亜麻布が魔術を行うのに、どんな役に立つのかは、この女に盗みを働かせた悪魔にしかわかるものではないが。この洗濯女の母親は、近所の無知で、身持ちの悪い後家で、その死んだ亭主は生前に、その女のことで、何かと苦情を言い、あの女は間違いなく魔女で、いつでも自分が危険な目にあったら、あの女は魔女として罰を受けるだろうと言って居た。この女は、自分の娘を弁護して、自分の娘を問いただしたグッドウィンの娘に極めてひどい言葉を投げつけた。この途端に、哀れなグッドウィンの娘は、いろいろと健康状態が悪くなり、これまでにない発作を起こしたが、それは癇癇や強硬症(精神分裂症に伴うもの)に現れる発作や、いわゆる驚愕症(Diseases of Astonishment)よりひどいものであった。』

(…… of what use this linnen might bee to serve the Witchcraft intended the Theef's Tempter knows! …… This Laundress was the Daughter of an ignorant and scandalous Woman …… whose miserable husband before he died had doubted she was undoubtedly a Witch …… This woman bestowed very bad language upon the girl …… immediately upon which the poor child become variously indisposed in her health, and visited with strange fits beyond those that attend an epilepsy or a Catalepsy, or those that thry call the Diseases of Astonishments.)

グッドウィン家での事件の発端は、盗みの嫌疑をかけられた洗濯女の母親が、自分の娘を詰問した13歳にグッドウィンの娘に、ひどい言葉を投げつけたのが原因で、娘が医学的にも普通には考えられないような激しい発作を起こしたことであった。この洗濯女の母親が魔女らしいという疑いの原因は、盗んだ亜麻布の用途、死んだ亭主の証言、汚い言葉を浴びた娘が病気になったことであり、更に日頃からの、この女にたいする、無知で身持ちが悪いという世評である。マザーが代表するピューリタン神学の観点からすれば、一つの事件が起り、それが通常の因果関係を超えて異常である時、当然そこに魔術効果や魔女の介在が連鎖的に意識されるのであるが、盗まれた亜麻布を魔術の儀式と結びつけ、更にそれを行なった疑いのある洗濯女の母親が、娘の異常な苦しみの原因であると断定するところに、ピューリタン共同体の中に魔術や魔女をめぐる緊張した人間関係が生じていたことが判るのである。

(Ⅳ節)『問もなく、最初に発作に襲われた13歳の娘の下の妹と二人の弟が次々に、年長の娘を苦しめている同じ発作を起こしたのである。二、三週間経って、四人の子供全員が悲痛な程に苦しめられたので、子供達の苦痛を目の当たりにした人は、どんな冷たい人でも心を砕かれたであろう。何人かの熟練した医者に助けを求めて相談した。そして特に我々の尊敬する、慎重な友人である、トーマスオクス医師 (Dr. Thomas Oakes) に診てもらったところ、子供達の異常な症状が、医学的に何であるか分からないので、この病気の原因は、恐ろしい魔術に他ならないと結論した。更にその危惧を確認したのは、この子供達が、かなりの間、同じ時期に身体と同じ場所を痛めつけられたことであった。子供達は、お互いに苦しんでいるのを見聞きしてはいないのに、そして痛みや捻挫は稲光のように疾いもので、一人の子供の首、手、背中、どこであれそこが痛むと、他の子供達も同じ所が痛むのであった。』

(…… Dr. Thomas Oakes …… concluded nothing but an hellish Witchcraft could be the original of these Maladies. And that which yet more confirmed such Apprehension was …… that the children were tormented just in the same part of their bodies all at the same time together ……)

(Ⅴ節)『子供達の苦しみは、引き続き次第に様々にもものになって行った。夜九時か十時になると、いつも悲惨な状態から解放されて、食べ物を摂り、それからはぐっすりと眠れるのであったが、昼間になると、非常に様々な病になやまされるのであった。時には、耳が聞こえなくなり、時には、口が利けなくなったり、目が見えなくなることもある、そして、これら三つの状態が同時に来ることもある。ある時は、子供達の舌が喉から引き出され、ある時には、顎につく程異常に長く張り出されたこともある。そんなに広く口を開けたので顎が外れたものであった。ある時には、まるで強いバネ錠のような力で、顎がしっかり閉じたことがあった。同じことが、肩甲骨、肘、手首等にも起ったのである。子供達は、身体が麻痺した状態で横たわることが時にはあったが、後ろへ身体が反り返って、腹の皮

が破れはしないかと恐れるほどであった。ナイフで切られたり、耐えられない程殴られたりしてあげるような非常に哀れな叫び声を立てたこともある。首が折れて、首の骨が首の中へ消えてしまったように思えたことがある。しかし突然再び首が硬直して動かなくなることがあったと思うと、今度は、首が殆ど曲がる程振られることもあった。そして、子供達が危険な動きをしようとしている時に、力でそれを阻止しようとしたら、子供達は、物凄い声で叫ぶのであった。この様にして、子供達は何週間かを過ごしたが、それは、大変に哀れな光景であった。この様な恐ろしい魔術の効力を更に証明することを挙げると、私の言葉を聞きたいと言うこの子供たちの一人の側で、祈りを捧げると、我々の祈りが終わるまで、その子供は耳が聞こえなくなっていたのである。』

この子供達の憐れな症状の描写はどこまでか、マザー自身の観察なのか判然としないが、両親や周囲の人間からの伝聞を含んでいることは当然であろう。マザーは、『疑いのない事実』とするが、事実の歪曲や誇張の有無は、最後まで問題になるところである。

(Ⅶ節)『この苦しみが降りかかったのは、宗教心の厚い家族であった。救われるには、宗教的な方法しかないということは、喜んで受け入れられることであったろう。多くの迷信的な提案が、私とその名前も、何をしているのかも知らない人から寄せられていた。この人達は、どれくらい必然性があるのか、どれくらい経験があるのか知らないが、いろいろな提案をしたのである。しかし悩む両親は、その様な助言を全て斥けた。悪魔に対抗するには、悪魔を縛る力を持つ神に対する祈りと涙の武器しかない、そして魔術と対決するには、神の恩恵が最善であることを試して見ようという立派な決心をしたからであった。そこで、ボストンの四人の牧師とチャールスタウンの牧師に、その魔女に取りつかれた家で、祈りの一日を持ってくれるように依頼したのである。牧師達は、信仰の篤い人たちと共に祈りを捧げたのであった。すぐにこの日、四人のうち一番幼い子供が、苦しみから救われ、以前の様な苦しみは感じなかったのである。しかし、更に、神に依り頼んだことから、大きな効果があったのである。』

(Many superstitious proposals were made unto them, …… but the distressed Parents rejected all such counsils, with a gracious resolution, to oppose Devils with no other weapons but Prayers and Tears, unto Him that has the Chaining of them; and to try first whether Graces were not the best things to encounter Witchcrafts with. ……)

迷信に頼らず、神に依り頼み、祈りを捧げることが、悪魔や魔術に対抗する方法であり、その効果がすぐに現れたことを述べているが、これは、マザーが繰り返し強調する最も重要な点であり、この記録を出版する目的でもあったと思われる。

(Ⅷ節)『我々が関与している家族の災難が判事達の耳に達し、間もなく慎重に、熱心にこの話の究明にかかったのである。子供達の父親は、隣人のグローバーという疑わしい不徳な女について苦情を訴えた。司法判事の所へ出頭させられた女は、自分のことについて、

非常に酷い話をしたので、監獄へ拘置されることになった。父親は、彼女の損失になるような事は何も証明できなかったが、この魔女は子供達に魔法をかける事に関心があることを否定することができなかった。神が存在することを信じているかどうかと尋ねられた時の彼女の答えは余りにも冒瀆的で恐ろしいものであったから、とても私のペンで書き記すことはできない。「主の祈り」を唱えることができるかどうかを試された時に、分かったことは、一節毎に彼女に対して繰り返され、それに従って唱えるように促されると、彼女は必ず可笑しな悪口を言って、それを台無しにするのであった。この実験は更に二度行われたが同じ結果であった。この異常な女を拘置してからは、子供達は皆安全であったが、この女と同族の或る女が、偶然この子供達の一人か二人に出会って、彼女の祝福、即ち毒づく言葉を投げつけた時、子供達三人が、再び以前のように具合が悪くなったのである。』

(…… and she being sent for by the Justices, gave such a wretched Account of her self, that they saw cause to commit her unto the Gaolers Custody. …… but the Hag had not power to deny her interest in the Enchantment of the Choldren; and when she was asked, 'Whether she believed there was a God?' her answer was too blasphemous and horrible for any pen of mine to mention. Whether she could recite the Lord's Prayer, and it was found …… she could not possibly avoid making nonsense of it with some ridiculous Depravations ……)

グッドウィンは、洗濯女の母親で身持ちの悪い女を訴えるが、証拠はない。しかし、魔女の疑いを掛けられた女は自分で証明してしまう。「神の存在を信じる」と確言しない。「主の祈り」を唱えることができない。この二点が決定的であったようである。マザーは、「主の祈り」のテストを重要視して、以後も繰り返している。

(Ⅷ節)『このようにして捕らえられた魔女は程なく裁判に掛けられた。この裁判で、彼女の仲間の何人かが、彼女にかけた魔法によってだと私は想像するのだが、法廷では、彼女の母国語であるアイルランド語でしか答えなかった。彼女は、英語を理解し、彼女の家族全員は以前は英語で話し合っていたのだが、裁判官と被告席の会話は、二人の正直で忠実な通訳によって伝えられたのである。間もなく、彼女は、自分で直接答えること、自分に対する起訴に抗弁した。それは、有罪を否定するより、自分がしたことを自白することによっての抗弁であった。この女の家の搜索が命令によって行われ、法廷に持ち込まれたのは、幾つかの小さな偶像、即ち、操り人形、或は、赤ん坊の形をしたもので、縫いぐるみで作られ、中には山羊の毛やそのようなものが詰めてあった。この恥ずべき女が認めたことは、これらの偶像を作ると、自分が悪意を向ける対象を苦しめるには、指を唾で濡らし、それらの小さな偶像を撫ぜたということであった。法廷には、苦しめられた子供達も出席していて、その女は、前かがみになり、大きな重しに押し潰されて死にそうになっているという風に萎縮していた。しかし、その偶像の一つが持ち込まれると、女は急に奇妙

な様子で立ち上がると、それを手に取ったが、その途端に、子供達の一人が全会衆の前で、哀れな発作に襲われたのであった。これは、判事達が危惧していたことであったが、用心深くもう一度、試してみると同じ結果であった。女は、「お前を援助するものが居るのか」と尋ねられると、「居る」と答えた。そして、傲然と中空を見上げると、「いや、居ない。もう、行ってしまった。」と言った。それから、この女は、自分を援助しているのは、自分のプリンス (Prince) で、そのプリンスと会体の知れない交わりを続けていると白状したのである。その夜、プリンスが、法廷でその女を見捨てたことを、悪魔の一人に警告して、「プリンスが私を卑劣にも裏切るようなことをしたから、私は全てを白状したのだ」と言っているのを他人に聞かれている。然しながら、法廷は、全てを明らかにするために、五、六人の医者を選任して、この女が精神に異状を来していないかどうか、そして、その愚行と狂気によって、魔女であるという評判を得てしまったのではないかどうかを調べさせた。医者達は、何時間もこの女と過ごしたが、女は何の話もしなかった。ただ「自分の魂はどうなると思うか」と聞かれると、「非常に重大な質問ですね、私には何と答えて良いのかわかりません」と適切で道理に合う答えをしたのである。この女は、自分がローマカトリック教徒であることを認め、「主の祈り」(Pater Noster) をラテン語で暗誦することができたのである。しかし、その一、二節が常に難し過ぎて、「どうしても、繰り返して言えません」と認めたのである。結局、医者たちは、この女が、正気であると報告した。そして、死刑の判決が下されたのである。』

(It was not long before the Witch thus in the Trap, was brought upon her Tryal …… at which the Court could receive Answers from her in none but the Irish …… It was long before she could plead unto her Indictment; and when she did plead, it was with Confession rather than Denial of her guilt …… There were brought into the Couet, several small Images, or Puppets, or Babies, made of Raggs, anf stufft with Goats hair, and other such Ingredients …… her way to torment the Objects of her malice was by wetting her finger with her Spittle, and stroking of those little Images …… she had no sooner taken it, than one of the Children fell into sad Fits before the whole Assembly …… she than confessed, that she had One, who her Prince, with whom she maintained …… Communion …… She owned her self a Roman Catholick, and could recite her Pater Noster in Latin …… but there was one clause or two always too hard for her, …… In the up-shot, the Doctors returned her Compos Mentis; and Sentence of Death was passed upon her.)

グッドウィン家の洗濯女の母親グローバーは、魔術を掛けたことを疑われ、それを否定しない。無神論者の疑いや、「主の祈り」が満足に唱えられない事などによって拘置され、

裁判が始まる。判事とのやり取りは、詳細には記録されていないが、尋問に対して（仲間の魔女に魔術をかけられて）アイルランド語を使ったこと、起訴に対する抗弁として、有罪を否定するのではなく、自分がしたことを認めたこと、家宅捜査で魔術に使う小さい偶像が見つかったこと、魔術をかける方法を自白し、それを実際に法廷で行い、子供が発作に襲われたこと、プリンス (Satan) と交わりを続けていたと自白したこと、他の悪魔との会話を聞かれていること、ローマカトリック信者で、ラテン語で「主の祈り」を唱えることができるが、満足とはいかないこと、数人の医者診断は、この女は正気であって、愚かでも狂気でもないことなど、これらの一つ一つが、有罪の証拠になって死刑の判決が下る。これらは全て、マザーが直接関与して、魔女を摘発し、処刑へ導く裁判の過程として出来上がって行ったものと考えられる。更に次に記述される、生き霊 (specter) の出現や魔王の集会への出席などの証言によって魔女告発の証拠が完成している。

(Ⅸ節)『グローバーが尋問され刑の宣告が下るまでの何日かの間に、グローバーの近所に住むヒューズ家の婦人が、グローバーについて証言しようとしたことがあった。その内容は、ある女性が六年程前に、酷く魔術をかけられて死んだが、臨終の床で、「自分が死ぬのはグローバーの故である、グローバーが、時折煙突から下りてくるのを見たことがあったからだ。この六年の間に、いつかこの事を話せると思って憶えていたのだ。」と言ったという話であった。このヒューズ家の婦人が証言しようとする時、その婦人のもう青年になろうとしている立派な男の子が、グッドウィンの子供達と同じような、痛ましく、驚くような様子で病気になるのである。その男の子は、ある晩、青い帽子をかぶった黒い物が部屋に居るのを見たと言い、それが手をベッドに入れて自分の内臓を引っ張り出そうとして自分を苦しめたことを激しく訴えた。その母親は、翌日、牢獄にいるグローバーに会いに行き、「何故、可哀想なあの子をあんなに酷く苦しめるのか」と聞くと、この魔女は、「お前が、自分と娘に悪いことをしたからだ」と答えた。ヒューズ家の婦人が否定すると、グローバーは、息子に会わせれば、元気にしてやると言って、更に、「私は、昨晚、お前の家に行ったよ、青い帽子をかぶった黒い物の姿で。そして、ベッドに手を入れて、息子の内臓を引っ張り出そうとしたが出来なかった」と言った。翌日、その母親が、息子を法廷に連れて行き、グローバーが、前を通り過ぎる時に好意を表す言葉を口にすると、魔女の判決以後、その息子は、もう病気になることはなかった。』

(I was at your house last night. Sayes, Hughes, In what shape? Sayes Glover, As a black thing with a blue cap. Sayes Hughes, What did you do there? Sayes Glover, with my hand in the Bed I tryed to pull out the boy's Bowels, but I could not ……)

魔女が、青い帽子をかぶった黒い物の姿になって、煙突から出入りするというのは、一般的概念になっていたようで、グッドウィンの子供達も度々証言する。この生き霊証言は、セイレムの裁判でも有力な証拠として取り上げられ、元牧師バーロウ (Burroughs) が処刑

されたのも、少女 Mary が、魔女の集会でパーロウから祝福を受けたという生き霊証言によるものであった。インクリスマザーが強力に反対し、無罪の罪で処刑される一人を救うために、十人の容疑者を逃がす方が良いと言ったのは、この生き霊証拠が極めて危険なものであり、これによる告発が欺瞞に満ちていることを見抜いていたからである。

(X節)『私は、刑の宣告を受けたこの惨めな老女を二度訪ねたことがある。この女は、自分に負わされた魔女使いの罪を決して否定しなかった。しかし、悪魔との同盟の状況については、殆ど白状しなかったが、今まで悪魔の会合には出席してきたこと、そこには、王子と他にも四人の魔女が居たことを認めた。その四人が誰であるかを話し、その王子は悪魔という説明であった。この女はアイルランド語しか話さなかったので、通訳が必要であった。色々な質問をしたが、長らく沈黙した後で、「私は喜んで十分な答えをしたいのだが、彼等が許可してくれないのだ。」と言ったので、「彼等とは誰だ?」と聞いたら、「彼等とは、私の霊、即ち、私の聖人です。」と答えた。(アイルランド語では、霊も聖人も同じ語を使うそうである)また別の時に、二人の主婦をその彼等に含めたので、その名前を聞いたら、立腹して、もう口をきこうとしなかった。

私は、彼女が悪霊との契約を破り、主イエスキリストに、永遠の契約によって彼女自身を委ねることの必要性と正しさを示したが、それには、「あなたは道理に合ったことを言われますが、私にはできません」と答えた。私に彼女のために祈って貰いたくないかと聞くと、「もし祈りが自分のためになるのなら、自分で祈ります」と言った。彼女の意志に反して、私に丁寧な言葉をいろいろ使って感謝した。私が立ち去ると直に、細長い石を取り上げて、誰を苦しめるためか知らないが、唾をつけて指でこすったそうである。』

(She never denied the guilt of the Witchcraft charged upon her but she confessed very little about the circumstances of her confederacies with the Devils; only she said, That she used to be at the meetings which her Prince and Four more were present at. As for those Four, She told who they were; and for Prince, her account plainly was, that he was the Devil……)

グローバーは、悪魔の会合に出席していたこと、そこには四人の魔女が居たこと、更に二人の主婦がその仲間にいることを白状している。その四人の名前は、それを聞いたマザーしか知らないが、記していない。魔女や魔術の権威、魔女裁判の有力な相談役、教会の指導者であるマザーが、グローバー以外の魔女の名前を承知しているという事は、住民の間に不安や緊張、恐怖や猜疑心を生じさせたに違いないと思われる。

(XI節)『この魔女が処刑されようとする時、「グッドウィンの子供達は、自分の死後も苦しみからは解放されないだろう。自分だけでなく、他の魔女も加っているからだ」と言って、その中の一人の名前を口にしたが、その名前をここで明らかにしない方が、その人に対する自然な愛情であろう。従って、グッドウィンの子供達の内の三人が、以前のような厳しい煉獄の苦しみを続け、その厳しい苦しさは、段々と元の七倍にもなって行ったの

である。これまでに苦しんできた病状も依然として続いていたが、数は言えないほど多くの新しい症状が加わった。それ等は、悪魔憑きにまで進行するある魔法に依るものであるという、知覚できる様々な証明があったのである。』

(When this Witch was going to her execution, she said, the Children should not be relieved by her Death, for others had a hand in it as well as she, …… All their former Alis pursued them still, with an addition of more, but such as gave more sensible Demonstrations of an Enchantment growing very far towards a POSSESSION by Evil Spirits.)

グローバーは、処刑される前に、自分以外にも魔女がいて、この一件に関与しているからには、グッドウィンの子供は依然として苦しみ続けると言う。実際、以前にも増して、その症状は酷くなり、マザーは、これを、悪霊に取り憑かれている症状(Possession by Evil Spirits)と定義したのである。

以上読んできたように、I節からXI節までは、グッドウィンの子供達が苦しい発作に襲われることから、グローバーがその犯人であると疑われ、裁判の過程で、魔術を使ったことを白状し、魔女として処刑されるまでの経過であり、魔女と魔術に関する記録である。マザーと被疑者のやり取りは、後にセイレムで生じた魔女騒ぎと、魔女裁判がどの様な過程によって進行したかを想像させるに十分なものである。

XII節から、XVI節までは、いわゆる悪魔憑きの症例を記述し、XVII節からXXXII節までは、マザーが、依然として悪霊に悩まされているグッドウィンの十三歳になる娘を自宅に連れ帰って、その症状や徴候をつぶさに観察し、最後には、神への祈りによって、苦しみから解放するまでが記録されている。XXXII節は、グッドウィンの娘が、瀕死の様子を見せるが、『神が死ななければならないと言われるのであれば、そうしなければなりません。』と言って、発作は治まる。これまで観察し、経験してきたことについてマザーは、『私の蔵書の中で、この子供が示してきた激情の発作(passions)に匹敵するような悪魔憑き(Demoniacs)は、聖書の様々な節についてのどの解説にも見当たらない。』と述べ、最後の節で次の様に締めくくる。

(XXXIII節)『これは、グッドウィンの子供達の話であり、様々な驚異が作り上げた話である。私は、私が真実と判断することしか述べてはいない。私は私自身、私が話すことの多くの部分の目撃者であり、……信頼できる目撃者が一人ならず何人も、進んで宣誓しようとはしない個所はこの物語には殆どないと信じている。最も重要な個所は、多くの批評眼のある観察者に目を通してもらっている。全ては、英国人のアメリカ(English America)の首都で、敬虔で勤勉な家族の身の上で起ったことである。……私は、これ以後は、悪魔、或は魔女の否定を私に強要しようとする人間には、些かも我慢しない決心である。疑う人間は無知であり、私たちがこれほど明白な確信を抱いているものが存在しないと主張する人間は、全くの恥知らずであると思う。……』

まじめであることが何であるかを知る人達は、私がこうして子孫に残す魔術と悪魔憑きに関する記録を熟読するならば、その努力を悔いることはないであろう。』

(後書き)『グッドウィンの(十三歳の娘を除く)三人の子供達は、マザーやその他の牧師たちの祈りによって、苦しみから一旦は解放されるが、悪魔は新たな攻撃を加えてきたのである。……また新たに、子供達の為に祈ったのである。……神は、子供達の病気を減退させ、子供達の中へ侵入した悪魔を退散させたのである。私が思うに、子供達が苦しみから解放されたことの一つに、子供達の苦しみに大に関係したと推定される、或る一人の惨めな老女の奇妙な死があったという事を世間の人達に知らせても不穏当ではないであろう。その老女が、死ぬ前にも、死ぬ時も、住んでいた救貧院では、恐ろしい物音がして誰もが気味悪い思いをした、そしてその老女は、目に見えない世界から復活した恐ろしい打撃を受けて、死を早めた様に思われた。……私が公表しなければならないことは、祈りと信仰が、子供達から悪魔を追放したということである。私が、この世の人達に証しすべきことは、「主は、真実に主を求めるとして全ての者の近くにおられる。そして恵まれし者は、主を待ち望む者全てである。」ということである。』²⁸⁾

.....

(all that I have now to publish is That Prayer and Faith, was the thing which drove the Devils from the Children; and I am to bear this Testimony unto the world, That the Lord is nigh all them, who call upon him in truth, and, That blessed are all they that wait for Him. Finished, June, 1689.)

後書きの結びは、救貧院で暮す一人の哀れな老女が、あの世から蘇った悪霊によって命を奪われたが、この老女も魔女の一人で死んだ時に家鳴りがしたと、騒霊の存在を示唆し、この魔女や悪霊も、神への祈りによって追放されたことを挙げ、魔女や悪霊に悩まされ、苦しめられている者が、「ひたすら主により頼み、主に祈ること」を強調して終る。

更に、付記として子供達の父親ジョングッドウィン(John Goodwin)が、マザーの記録を読んだ後で、それが真実であることを立証するために、自分で観察した事実を記述していて、第一事例と共にこの著作の一部に収められている。この第一事例は、更に第七事例まで拡大されているが、今回は、紙幅の都合で、第一事例のみを取り上げた。

コトンマザーが魔女や魔術に関して住民に与えた影響は、同時期に発表した『悪魔の力と悪意に関する講話』(A Discourse on the Power and Malice of the Devils)『悪魔に関する講話』(A Discourse on Witchcrafts) 29) を読めば、尚よく理解できると思われる。

7. 結 び

セイレムの魔女妄想、その結果としての魔女裁判は、何故起ったのかについて考察する一つの手掛かりとして、コトンマザーの魔術や魔女に関する著作の一部を読んだのであるが、マザーの用語や文体、又その内容を通して、17世紀末の変容するピューリタン共同体

の危機的状況を多少なりとも理解することはできるのである。

セイレムの魔女事件は何故起ったのかという問いに、小論の結びとして言えることは、この事件の背景として述べてきたように、ピューリタン共同体の根幹である教会構成員の本質が変化し、共同体を支えている『目に見える聖徒』が次第に減少して行き、現実的な利得を重んじる商人階級の台頭によって、紳権政治の基盤である教会の権力が危機に瀕していた時期に、その危機感がコトンマザーを指導者とするピューリタン聖職者が唱える悪魔や魔女の实在、悪魔陰謀説と結びついて魔女裁判の進行を早め、多くの魔女妄想の被害者、犠牲者を出したということである。一方は、権力や地位、財産等を持たない普通の人間、セイレム事件の多くは農地に頼る貧しい人達や、思春期の少女達であったが、その人達の様々な内面的要因、例えば、富を持つ者に対する羨望、土地をめぐる私怨や争い、父権的家族制に対する青年男女の欲求不満、牧師や行政官に対する反感や不満、ピューリタン社会の抑制的体制への反発、自然の荒野で生命を脅かされる不安や厳しい生活等が引き金となって、その鬱屈した内面が、魔女や魔術に関する民間伝承や、コトンマザーを始めとするピューリタン聖職者の説教や印刷物を媒体として表現されたのが魔女妄想であり、魔女告発であったということである。

コトンマザーが、グッドウィン家の子供達を観察した記録や、その中で展開される魔術や、魔女の实在論を読めば、魔女裁判に明らかに重要な役割を果たしていることは否定できない。しかし、マザーが名誉や権力を得ようとして、魔女狩りに奔走したと非難するのは、小論でも述べたように、カレフのようなピューリタン聖職者に反感を持つ新興の商人階級の誹謗であることは歴史的文脈においても明らかである。

コトンマザーは、1690年、3月、インディアンやフランス人が侵入を始めたという知らせを受けて、ボストンで説教をした。『ニューイングランドの住民が抱くべき公共精神』(A Public Spirit Recommended unto The Inhabitants of New England) という題のこの説教は、マサチューセッツ湾植民地が危急存亡の時にあたって、『神の民に尽くすために、全てのキリスト者が持てる全てのものを、進んで心から危険にさらすべきである、それは、危険と災難が訪れる時に要求されるものである。』という要旨で、全ての住民が、「大いに非難されるべき悪」である私利的精神 (private spirit) を捨て、植民地全体のために、人間として持つものすべて、生命も財産も投げ出す覚悟でなければならないと説いている。そして『ピューリタン共同体が設立されて以来、経験のない試練の時にあたって、許しがたい墮落と背教 (Degeneracies and Apostasies) を伴う風俗の退廃が、余りに多くの人たちの間に見られる。神の摂理の下にある我々が、いかに許し難いかを見て来られた神の裁きが、今その極みに達しているのである。「斧は、すでに木の根本に置かれている。(Math. 3-10)」もし速やかに、神の怒りを引き起こすような悪行を改めなければ、我々は、すぐにも滅びるであろう。』と改心 (Reformation) の必要性、緊急性を強調し、植民地全体として、完全に悔い改め (thorough Repentence) を証明しなければ、何事も成就しないと説

き、集会 (Court) の命令を伝達する。『悪徳やあらゆる種類の放蕩や瀆神を禁ずる植民地の法律は、(最近では政治の干渉によってその効力を失っているが)今や忠実に執行されなければならない。特に、瀆神、呪い、瀆神的な悪口や嘘、不法な賭け事、安息日を守らないこと、無為、酩酊、不潔を禁じる法律、そしてこれらの不敬な行為を誘い助長することを禁じる法律は執行されなければならない。(Laws again at Blasphemy, Cousing, Prophane Swearing, Lying, unlawful Gaming, Sabbth breaking, Idleless, Drunkenness, unleanness, and all the Enticements and Nurseries of Such Impieties) これらの法律を順守することによって、我々が、良き働きをすることに熱心である特別な民であることを、自ら認めることができるかも知れない。下級役人に命じられたことは、これらの法律に違反する者を見つけ引き出し、それらの者達が公正な懲戒罰を受けることを覚悟しなければならない事を告知することである。』³⁰⁾

この説教を読めば、コトンマザーを始めとする聖職者や指導者が、外面的脅威と内面的分裂によって、その存続が危うくなっているピューリタン共同体であるマサチューセッツ湾植民地を、John Winthrop が、'A Model of Christian Charity' の中で説いたキリスト教徒の美德と敬虔の模範となる理想の都市 "A City upon a Hill" へ導こうとしていたことが分かるのである。ウインスロップは、同行した人達に、神との契約によって共同体を確立するために全員が協力し友愛を発揮して働くことを求めていたが、この人間集団が分裂し、ピューリタンの理想が混沌とした個人主義に陥る過程と常に戦っていた。ウインスロップが秩序を保つためにいかに厳格であったかは、A Defense of an Order of Court (1639) で有名である。ウインスロップからコトンマザーまで、目指す理想は同じであった。17世紀末の膨張した人工と押し寄せる商業化の圧力に抵抗して、コトンマザーはピューリタン正統の伝統を守り、教会に権威を高めるために住民全体に改心を迫り、厳しい戒律を要求したのである。コトンマザーを始めとするピューリタン教会の権威に対抗する勢力としての商人階級は既に1630年代に、牧師が解釈する聖書は、健全な商業の要件を十分に考慮に入れていないという疑問を抱いた。ハッチンスン夫人 (Mrs. Anne Hutchinson) が、ピューリタン正統を自負する牧師と教義上の対立から、律法不要主義者 (Antinomian) として追放される事件の時には、商人達は夫人の側に立って牧師に反抗し、ウインスロップですら、総督への再任を阻止されたのである。大移住 (Great Migration) の後、貿易拡大の必要性に迫られた商人にとって、旧約の律法書から引かれる古い制約は重荷となったのである。1690年頃には、新特許状に記された教会権力の様々な制限と、英国との交易上の関係が改善されたことで企業家精神と実利を重んじる商人階級が勢いづくのに対して、ピューリタン教会の権威を再興させ、衰退する敬虔を再生しようとしてコトンマザーが懸命に努力するという構図の中で起ったのが、セイレムの事件であると考えれば分かり易いと言えるのではなかろうか。

ここで、裁判の記録を詳細に検討した Emory Elliott を引用しておきたい。『ピューリ

タンのニューイングランドにおける言語や文献の記録や発達を調べて明らかになることは、セイレムの悲劇の種子は植民地の出発点で蒔かれ、その種子がもたらした果実は、何十年もの間に、象徴的意味、言葉の想像力、論証的記述を育てて来た結果であった。多くの点で、ピューリタンのニューイングランドに残されている文献によって読み取れることは、どのようにして、喜びに満ちた信徒集団の空想的な夢が、壮大な計画、意識的決定、無意識の妄想、真摯な、或は利己的戦略などによって、1692年に生じた混乱、告発、恐怖、そして悲嘆へと変形していったかという警告である。ピューリタンが生きたニューイングランドの立法者や言葉の創造者は、しばしば、最善の意図を抱いていたのだが、ピューリタンの実験を、1630年の John Withrop の空想的な夢から、1680年代から1690年代における様々な失敗へと、思わず知らず導いて行ったのである。その年月の間に、この世での完璧とあの世での救いを求めたが、最初から、自分達が直面する現実自分達の様々な夢にはとても及ばないと心の奥では思っていた人達の経験を捉えて、ピューリタンの著作者達はそれを書き留めたのである』³¹⁾

セイレムの魔女裁判をいろいろな角度から考察すると、この事件は、単なる魔女騒ぎではなく、17世紀末に至って顕在化した、ピューリタン共同体に本質的に内在する問題の一つであり、時代が次の道標に向かって進もうとする予兆の一つであったとも言えるであろう。『1690年代から1670年代の二十年間は、ニューイングランドの知性と宗教の歴史のなかで、非常に重要な時期であり、転換期であったと言えるかも知れない。』³²⁾

参照・引用文献

- 1) 2) 3) 4) NATHANIEL HAWTHORNE Tales and Sketches The Library of America 1982, pp.205—216.
- 5) 6) The Puritans in America ed. Alan heimert & Andrew Delbanco Harvard University Press 1985, pp.337—338.
- 7) THE ART OF AUTHORAL PRESENCE Hawthorne's Provincial Tales G.R. Thompson p.199 (Upham と反対の立場をとった Chadwick Hansen's Witchcraft at Salem についても言及している。).
- 8) 9) The Puritans in America pp.347—349.
- 10) A Religious History of American People Sydney E. Ahlstorm Yale University Press 1972, pp.158—161.
- 11) 12) 13) The Puritan in America pp.275—276.
- 14) The Cambridge History of American Literature Volume One pp.171—172.
- 15) America in Legend Richard M. Dorson Folklore from the Colonial Period to the Present Pantheon Books 1973, pp.12—13.
- 16) The Puritans in America p.282.
- 17) ibid. p.340.
- 18) A Library of American Puritan Writings The Seventeenth Century Volume 23 Cotton Mather: Historical Writings Memorable Providences.

- 19) The Puritans in America p.330.
- 20) Memorable Providences The Epistle Dedicatory.
- 21) 22) 23) *ibid.* To the Reader.
- 24) *ibid.* The Introduction.
- 25) Oxford Companion to the Bible 1993 pp.163—163.
- 26) 魔女狩り 森島恒雄 p177.
- 27) Memorable Providences: The First Exemple SECT I—XXXIII.
- 28) *ibid.* Postscript.
- 29) *ibid.* A Discourse on the Power and Malice of the Devils A Discourse on Witchcraft.
- 30) Cotton Mather: Historical Writings The Present State of New-England.
- 31) The Cambridge History of American Literature Volume One pp.181—182.
- 32) A Religious History of American People p.161.

On Puritanism in New England

— The Witch Trial (1692) and Cotton Mather (1663-1728) —

Masao OKAMOTO

Faculty of College of Liberal Arts and Sciences,

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712, Japan

(Received September 30, 1995)

In one of the short stories by Nathaniel Hawthorne titled "Alice Doane's Appeal", the narrator gave a description of the Witch Trial as a fact against a fiction to move the young girls with success. In that eloquent narration, appears Cotton Mather as a bloody witch hunter masterminding the incident.

However, the standardized books of American history, even "Religious History of American People", do not refer to Cotton Mather explicitly and specifically.

The purpose of the article is to read one of the works by Cotton Mather concerning witchcrafts to try to understand how influential Cotton Mather was on the Salem incident in the late seventeenth century.